

※黎明(れいめい)：明け方、夜明けの意

特集：認知症ケアチームの取組み

話題：IBD／ピロリ菌専門外来を開設しました ほか

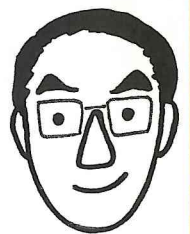


写真：オープンホスピタルにて検査体験をする参加生徒

インタビュー

「地域医療構想の策定に思う」

院長 三科 武



少子高齢社会の進行に対し医療と介護の一体改革が進められております。2025年、団塊の世代の方々が75歳の後期高齢者となり、有病率が増加する時にも持続可能な医療を提供できるよう、山形県で地域医療構想が策定されました。

地方における人口減も大きな問題であり、新しい地域医療連携の模索もされております。当院でも地区医師会と連携を強め、病院機能の分化、在宅医療の推進を行わなければなりません。地方の医師不足を助長すると考えられていた新専門医制度は一年間の延期となりました。当院でも専攻医が働ける制度に対応していく必要があります。鶴岡を目指す医学生、若い医師たちが多く集まれる病院にしたいと思います。さて、今年のオープンホスピタルにも市内から多くの高校生が参加してくれました。病院の中の医師、薬剤師の働きを自分の進路の参考にしていただけでは幸いです。若い力と斬新なアイデアを持つ高校生たちに期待をしております。

特集

認知症になっても…

安心して療養を継続し地域で生活できるお手伝い

荘内病院 認知症ケアチームの取組み

〈全国平均・山形県・鶴岡市の高齢化率の現状〉

	全国平均	山形県	鶴岡市
昭和50年 (1975)	7.9%	10.1%	10.9%
平成22年 (2010)	23.0%	27.6%	28.7%
平成26年 (2014)	25.1%	29.9% 全国7位	31.3% 県内25位

平成27年9月15日 26.7%
平成28年9月15日 27.3%

(参考)

- ・総務省統計トピックスNo90、97
『統計から見た我が国の高齢者(65歳以上)～「敬老の日」にちなんで～』
- ・山形県「山形県高齢社会関係データ集(平成27年)」
- ・鶴岡市「鶴岡市高齢者福祉計画 第6期介護保険事業計画」

高齢化社会の現状

今年の敬老の日に、65歳以上の高齢者(以下「高齢者」)の人口が推計3,461万人、高齢化率の全国平均が27.3%と発表されました。1年前の同日は、3,388万人(高齢化率は26.7%)でしたので、比較すると73万人(0.6%)の増加となりました。世界一の高齢化率をさらに更新し、過去に誰も経験したことがない時代に突入しているのです。

鶴岡市の高齢化率(平成26年)は、31.3%で、高齢化率の全国平均をかなり上回っています。当院の入院患者数の状況(平成27年度)を確認したところ、ある1日の入院患者数における高齢者の割合は、73%でした。



認知症について考える

現在、日本において65歳以上の5人に1人、85歳以上の4人に1人が認知症を発症しています。患者さんの中には認知症を抱えた上に複数の病気で入院又は外来受診しているというケースも年々増加していると感じています。「認知症」の為に、その行動や心理症状が著しく現れる方、意思疎通が困難なことで、疾病治療に支障をきたし、入院生活を継続出来ない方、環境の変化の影響が大きく、混乱につ

ながる方もいます。患者さんの中には、入院前は在宅で自立した生活が可能だった方もいます。しかし、入院という環境の変化に戸惑い、不安が増すことで、見当識障害が悪化することが多いようです。また、生活リズムが乱れ、夜間眠れず、昼夜が逆転した生活に陥ることや、病状の悪化により、さらに認知機能の低下を招き、悪循環を起しやすくなります。

認知症チームの結成

そのような状況を改善するため、厚生労働省と関係11府省庁が新オレンジプラン(※)を策定し、国を挙げての取り組みが行われています。平成28年度の診療報酬改定で診療報酬化され、荘内病院でもこの4月に認知症ケアチームを結成しました。

ここで、認知症ケアチームの活動内容を紹介いたします。入院という環境の変化による戸惑いを少しでも減らすため、患者さんのご家族へ、馴染みの物を持参していただ

※新オレンジプラン(認知症施策推進統合戦略):認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指し、厚生労働省が関係11府省庁と共同で策定。～厚生労働省ホームページより～

くよう協力していただき、環境調整を行い始めました。記憶が曖昧になった患者さんには、『荘内病院に入院中』や『便所』の表示、点滴固定部位に『大事な治療中抜かないで』『大切』等、記憶に留まりやすい工夫も試しています。時には患者さん同士のふれあいの場として、今は月1回ですが、院内ミニデイケアも実施しています。



点滴部位の
お願い文書



院内ミニデイケアの風景

また、外来患者さんやそのご家族にも関わりを持たせていただいています。ご希望であれば退院から1カ月の間に、5回までは医療保険を利用して荘内病院の看護師の訪問もはじめました。
(チーム介入全ての患者さん対応ではなく、療養移行期に必要と判断したケースや、在宅やそれに値

する施設退院のケースに限ります)。

さらに、多職種のコミュニケーションを大切にしています。患者さんをケアする上での注意点を伝達、飲んでいるお薬に問題がないかの確認、認知機能の評価、有効なりハビリテーションの提案、退院に向けてのお手伝い等、多職種で知恵を出し合い、それぞれの患者さんに適した関わりをもってきました。生活リズム改善の為に可能な範囲で薬物に頼らないケア方法を提案し、『認知症ケア』の困難さだけに注目していた視点から、

患者さんの行動の裏に隠れている理由を探り、どのようにアプローチをすれば少しでも穏やかに過ごせるか、以前より少しでも抑制が減らせるかを皆で日々検討し、週1回程度巡回し状況を確認しています。試行錯誤の中、『認知症ケア』へのさらなる一歩を踏み出しています。



認知症ケアチーム
検討会の風景

これからの認知症ケア チームの在り方

急性期病院では、認知症を抱えた患者さんの入院治療は難しいというイメージがあります。認知症のため、自分がいる状況や、病気と治療について理解できないために、抑制具を使用して、行動をある程度制限することは仕方ないという説明もあったかと思えます。しかし、患者さんの意思を尊重しながら、より柔軟なケアを提案していくことが、認知症ケアチームの在り方だと考えています。

認知症ケアチーム結成から、半年が経過しました。入院棟の数箇所に限定していたチームの活動範囲を順次拡大していく予定です。今後も荘内病院認知症ケアチーム一丸となって活動を継続し、院内はもちろん住み慣れたこの庄内の地で、患者さんが穏やかに安らかに療養生活を継続出来るよう日々研鑽・努力を重ねていきます。

認知症ケアチームの紹介

入院生活を
穏やかに安らかに
過ごしていただけるよう
お手伝いします



- ❖たとえ認知症ではなかったとしても、入院という慣れない環境や治療、入院してきた病気の影響で脳にもストレスがかかります。
- ❖本来受ける予定であった治療やケアが難しくなったり、入院生活に支障が生じたりします。



認知症ケアチームはどんな事をするの？

- ①治療がスムーズに出来るようお手伝いします
- ②飲んでいるお薬について確認します
- ③患者さんが困っていることをお手伝いします
- ④ご家族の困っていることの相談
- ⑤退院後1ヶ月以内のご自宅に訪問指導・相談
(希望された場合のみ、5回まで。入院費と別途料金となります。)

【チームメンバー】

- ・医師・看護師・臨床心理士・社会福祉士
- ・薬剤師・理学療法士・作業療法士

【認知症かな？認知症ケアって？とお悩みでしたら…】

お気軽にお近くの看護師まで
ご相談下さい。



荘内病院認知症ケアチーム

IBD/ピロリ菌専門外来を開設しました

荘内病院では、今年の9月に「IBD/ピロリ菌専門外来」を開設しました。担当医として診療に携わっていただいております、池田内科医院の渡邊秀平先生から当外来を紹介していただきます。

IBD（炎症性腸疾患）には、主にクローン病と潰瘍性大腸炎があり、どちらも消化管に慢性的な炎症を起こす難治性の病気です。腹痛、血便、下痢などの腹部症状が慢性的に続いたり、腸閉塞、消化管穿孔、大量下血など緊急手術を要する場合もある対応が大変難しい病気でもあります。

近年、どちらの病気も急激に増えていまして、特に学業、就職、結婚、出産など人生の重要な節目を迎える若い世代での発症が多いため、なんとかしなくてはならない病気の1つです。

私の専門は、消化器免疫で、母校である札幌医科大学、そしてその関連病院である札幌厚生病院で多くのIBD患者さんを診療してきました。また、上司が厚生労働省の「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究班」の研究分担者であったこともあり、IBDの新しい治療につながるように、基礎研究も行ってきました。ここ庄内でも質の高いIBD診療を提供し、患者さんのために少しでもお役に立てるよう頑張っていきたいと思っておりますので、治療に難渋している患者さんがいらっしゃいましたら、ご紹介していただければ幸いです。どうぞよろしくお願い致します。



渡邊秀平先生 プロフィール

勤務先：医療法人社団久医会 池田内科医院 院長

専門：消化器免疫、消化器病

略歴：2003年 札幌医科大学 卒

ひと言：第2の故郷であります鶴岡で、皆さんのお役に立てるよう、精進したいと思っております。よろしくお願い致します。

診療科紹介 ～整形外科～

整形外科は、手足や背骨などのケガ（骨折など）や、変形性膝関節症による膝の痛み、腰からくる下肢神経痛などの治療を行っています。計8名の整形外科医が、それぞれの専門分野（脊椎、関節、手など）で分担して診療にあたっています。また、特殊領域である骨・軟部腫瘍、小児整形外科、関節リウマチに関して、大学病院などから定期的に各分野の専門医に来てもらい、外来診療、手術治療を行っています。

高齢化社会となり、足の付け根の骨折（大腿骨近位部骨折）に対する手術、変形性関節症に対して人工の関節に入れ替える人工関節置換術、下肢神経痛の原因となる腰部脊柱管狭窄症に対する手術が多くなっており、患者さんの症状の改善のため、日々頑張っています。

近年では、人工関節置換術で術前シミュレーションシステムや、脊椎手術で術中ナビゲーションシステムを導入し、より安全、より正確な手術を目指しています。また、平成28年4月より、新潟手の外科研究所病院から新しい医師が加わり、手のしびれの原因となる手根管症候群に対して、従来の方法よりも傷の小さい鏡視下手根管開放術を患者さんの希望により行っています。患者さんの満足度の向上に役立てればと考えております。（整形外科主任医長 後藤 真一）

